

対立の時代

名大オケの記録によれば、1974年度の定期演奏会は異例であった。普通ならば、定期演奏会は6月頃と12月頃に開催される。ところが、この年度は6月の演奏会がなく、冬に2回の演奏会が開かれた。しかも11月の演奏会のメインプログラムがブルックナーの交響曲第9番、1月の演奏会のメインがベートーベンの交響曲第9番「合唱付」であり、学生オーケストラにとっては屈指の大曲2つが、わずか2か月の間をおいて演奏されたのだった。

この異例の事態は、団内の深刻な路線対立の結果であった。前々から金管楽器奏者を中心にブルックナーの交響曲を定期演奏会で取り上げたいという希望があったのに対し、それに強く反対する意見が弦楽器奏者にあった。当時、定期演奏会の曲目は、最終的に全団員が参加する「総会」での投票によって決められていた。そのため、「総会」が近づくと、票集めの動きが活発化し、特に1年生などの下級生をターゲットにした激しい”オルグ”（勧誘工作）が水面下で行われた。

団内の対立は1973年冬の演奏会の曲を決める「総会」で決定的となった。金管グループが推すブルックナーの交響曲第4番に対抗して、弦楽器奏者たちはブラームスの交響曲第4番を推し、「総会」において1票差でブルックナー派が勝利した。ところが、ブラームスを推した人々が、ブルックナーをやるなら演奏会に出ないと言いだした。結局、ブルックナー派がしぶしぶ妥協し、演奏会の曲目はブラームスの4番となった。

翌1974年度の異例の演奏会配置は、こうした過去を背景にしていた。ブルックナー派の怨念を解消し、しかも両派の対立を再燃させないために、1年間の中でブルックナーの交響曲とブルックナーでない交響曲の両方をやることを最初に決めておき、両方の練習を並行して行うという案が考え出されたのである。

名大でのブルックナー派とブラームス派の対立は、19世紀末のウィーンでの両派の対立を彷彿とさせる。ブルックナー（1824～96）とブラームス（1833～97）は、ともに人生の後半をウィーンで過ごした。バッハ、ベートーベン、シューマンと続くドイツ音楽の正当な後継者とみなされたブラームスと、熱狂的なワーグナー信奉者によってワーグナー亡き後、その後継者に祭り上げられたブルックナー。両者は激しく対立していた。ただし、同じ時期にウィーンに住んでいたブルックナーとブラームスが直接互いを批判し合ったというよりも、2人を取り巻く音楽評論家や音楽ファンが、それぞれの支持派に別れて論争していた。

マーラー（1860～1911）は、こうした状況のウィーンにやってきた。マーラーは、ボヘミア（現在のチェコ）の田舎町で生まれ、15歳の時に父に連れられてウィーンにやってきた。彼はウィーン音楽院に入学し、17歳の時にはウィーン大学の講義に

も出席するようになった。ちょうどこの時期、ブルックナーがウィーン音楽院でもウィーン大学でも教えていたから、マーラーがブルックナーの授業を受けた可能性は高い。また、ブルックナーに宛てた手紙の中で、マーラーはブルックナーのことを「先生」と呼びかけている。そうしたこともあって、マーラーはブルックナーの弟子であるとか、ブラームス派とブルックナー派の対立の中でブルックナー派にくみしているといった言われ方をされる場合もあるが、実際は明確な師弟関係はなかったようだ。

一方、マーラーとブラームスの関係については、マーラーが学生時代に演奏会の会場かどこかでブラームスを目撃したということはあったかもしれないが、2人の関係が明確な形で記録に残っているのは、ずっと後のことである。マーラーはウィーン音楽院を卒業した後、各地の歌劇場で指揮者として活躍した。1890年にブダペストの歌劇場でマーラーがモーツアルトの「ドン・ジョバンニ」を指揮したとき、たまたまそこに居合わせたブラームスが「こんなすばらしい演奏を聴いたことがない」と絶賛し、それを後で知ったマーラーはとても喜んだ、という記録が残っている。

当時のヨーロッパは、産業革命の影響が広く浸透し、貴族に代わる新たな支配層として産業資本家（ブルジョワジー）が各地に誕生した。彼らは貴族のマネをして、オペラハウスでの社交を好んだので、各地の小さな都市にまで豪華な歌劇場が建設された。マーラーは、こうした時流にうまくのった。ウィーン音楽院を卒業後、まずライバッハ（現在のスロベニアのリュブリナ）の歌劇場の楽長に就任した。それから2年後にオルミツ（現在のチェコのアオモウツ）、同じ年にカッセル（ドイツ）、2年後にプラハ（チェコ）、翌年にライプチヒ（ドイツ）、2年後にブダペスト（ハンガリー）、3年後にハンブルク（ドイツ）と、どれも短期間で歌劇場を渡り歩き、小さな町からより大きな都市の歌劇場の指揮者へと出世の階段を上っていった。彼が最後に目指したのは、最高峰のウィーン宮廷歌劇場であった。それはなかなか困難であったが、ブラームスの推薦などが奏功し、ついにマーラーはウィーン宮廷歌劇場の楽長に就任することができた。ブラームスはマーラーにとって恩人であった。

このようにマーラーは、ブルックナー派とブラームス派が対立するという時代状況の中で、どちらの派に属するともみなされずに、振る舞うことができた。それは、彼が作曲家ではなく指揮者であると認識されていたからであろう。マーラーは生前、指揮者としての名声は得ていたが、作曲家としては、無視または酷評され続けた。交響曲第1番は、マーラーが各地の歌劇場を転々としているときに作曲され、彼がブダペスト歌劇場に勤めているとき彼自身の指揮で初演、その後いくつかの都市で演奏されたが、ほとんどの批評は否定的なものであった。くだらない、悪趣味、不快、音楽理念に欠ける、等々。

マーラーの交響曲第1番がウィーンで初演されたときの様子が、マーラーの親し

い友人の日記に残されている。1900年11月18日、演奏はウィーン・フィルハーモニー、指揮はマーラー自身であった。

「マーラーのキーンというイ音のフラジオレットが会場を満たしたそもそもの最初から、聴衆はそわそわしたり、退屈したり、肝をつぶしたり、わざと咳払いをしたり、その上不愉快さや難しさから笑い声さえ立てた。要するに、音楽がどうなっているのかさっぱりわからなかったのである」(ナターリエ・バウアー＝レヒナー著、高野茂訳『グスタフ・マーラーの思い出』による。以下同じ)

聴衆は音楽にメロディを期待する。しかし、交響曲第1番の出だしは、同じ音がずっと続く。しかもその音は、弦楽器のフラジオレットという奏法によって、もやのようにつかみ所がない。

「第一楽章が終わると、拍手には早くも非難の意志表示がまじって聞こえた。人々にとって理解しやすい第二楽章のあとでは、文句のない拍手が聞かれた。しかし、《マルティン兄》楽章では聴衆はもう我慢できず、彼らはあからさまに笑い声を立てた。」

《マルティン兄》というのは、第三楽章の最初にコントラバスのソロによって奏でられる短調のメロディである。これはヨーロッパではよく知られた民謡をもとにしており、長調になると英語圏では「Are you sleeping?」、日本では「グーチョキパーで何作ろう」になる。

「演奏が終わると大騒動が起こり、拍手と非難との応酬がいつ果てるともなく続いた。マーラーはふだんならば反対の意志表示がひとつでもあれば、指揮棒を投げ捨てて二度と姿を現さないところであるが、何度も舞台に出てきて、彼を熱狂的に支持する人たちの喝采に感謝の気持ちを表した。」

ということは、会場の一部には、作曲家としてのマーラーへの支持者もいたようだ。「そこにはマーラーの作品に魅了され感激した人たちもかなりいた。彼らは他との対立から感情を燃え立たせたので、はげしい賛否の対立が爆発し、この二つの陣営は互いに暴力沙汰を引き起こしかねないありさまだった。」

さて、マーラーは名大オケにどのように受け入れられたのか？

私が名大オケに入団したのは、このエッセイの冒頭に記した出来事があった翌年の1975年である。この年には、ブルックナー派と反ブルックナー派の対立は消えていた。おそらく反ブルックナー派の多くが卒業してしまったことや、ブルックナー9番を実際に演奏してみて、ブルックナーへのアレルギーが弱まったためであろう。

私の同期にM君というチェロ奏者がいた。彼は熱心なマーラー・ファンであった。彼はあるとき私のところにやってきて「おまえがうらやましい」と言う。どうしてかと尋ねると、「おまえの誕生日の日付は、マーラーの誕生日と同じだ。だが自分の誕生日は、マーラーの命日と同じだ」と答えた。マーラーは7月7日に生まれ、5月18日に亡くなった。

M 君は、定期演奏会でマーラーの交響曲を演奏するという夢を実現するために、当時の名大オケで運動部のキャプテンに当たる「総務」に立候補した。しかし、彼は総務には当選できたが、マーラーの交響曲をメインプログラムにすることへの賛同を得ることはできなかった。それは、マーラーが嫌われたためではなく、多くの団員、特に管楽器奏者が技術的に演奏は困難と考えたためであった。それでもあきらめきれない M 君は、マーラーの交響曲第 5 番第四楽章を定期演奏会で取り上げる案を考え、皆を説得した。この楽章の編成は弦楽器とハープだけで、速度はゆっくりで技術的な困難さが少ないと思われた。果たして、1977 年冬の定期演奏会は、メインプログラムがブルックナーの交響曲第 7 番、サブプログラムがマーラーの交響曲第 5 番第四楽章「アダージェット」で実現した。この演奏会の一部が NHK ラジオで放送される名演となった。これが名大オケの定期演奏会でマーラーが演奏された最初であるが、交響曲の一つの楽章のみを演奏したという点で異例の演奏会でもあった。

Program

ヨハネス・ブラームス
悲劇的序曲 作品81

Johannes Brahms
Tragische Ouvertüre Op.81

— 休 憩 —
Pause

グスタフ・マーラー
交響曲第1番 ニ長調「巨人」

Gustav Mahler
Symphonie Nr.1 in D-dur

I. Langsam, Schleppend, wie ein Naturlaut - Im Anfang sehr gemächlich
II. Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell
III. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
IV. Stürmisch bewegt

指揮：和田 一樹
Kazuki Wada

2016年12月11日(日) 午後6時30分開演
愛知県芸術劇場コンサートホール

名古屋大学交響楽団第 111 回定期演奏会プログラム